

# 西日本有数の財政力を誇る都市へと成長



▶文化会館で行われた合併記念式典(平成18年)



◀白色LED (提供/日亜化学工業㈱)



▲東四国国体ホッケー競技 (橋湾中浦緑地)

## 躍動する 平成のエネルギー 全国そして世界へ

21世紀に向かって伸び行く阿南をさらに勢いづけるさまざまな出来事がありました。中でも市民の活躍が光ったスポーツシーンは、私たちに明日への活力を与えてくれました。

平成4(1992)年、選抜高校野球大会に新野高等学校が初出場を果たし、平成8年には夏の甲子園に出場しました。あこがれの聖地で旋風を巻き起こした球児たちの活躍ぶりは、伸びゆく阿南を象徴するかのような力強さで、全国の高校野球ファンに鮮烈な印象を与えました。

また、平成5年には、東四国国体が開催され、ホッケー、馬術、銃剣道の競技会場となった阿南市には、全国から大勢の選手や関係者が集い、熱戦が繰り広げられました。徳島県勢は、この3種目で総合優勝を果たし、地元の期待に応えました。

国体の熱気冷めやらぬ11月、阿南市に本社を置く日亜化学工業㈱が20世紀のうちには不可能といわれた高輝度青色LEDの開発と製品化に成功し世界の注目を浴びました。

その後、平成7年に青紫色半導体レーザーの開発、平成8年には、蛍光体とLEDを組み合わせたという、蛍光体メーカーならではの技術により白色LEDを發明するなど、相次いで世界初の光半導体を商品化しました。

白色LEDが開発されたことにより、照明分野では、省エネ効果やデザイン性が高

## 文化・スポーツ 市民交流施設の充実

市民のスポーツ熱と健康志向の高まりを受け、文化、スポーツ、市民交流施設の充実に努めました。

平成5年に県南随一の規模を誇る武道の殿堂「武道館」が完成。平成7年には、市民の健康・高齢者及び男

## 西日本有数の財政力を誇る 産業都市へと成長

臨海部における工業開発を実現した阿南市は、「平成の大不況」と呼ばれたバブル経済の崩壊による影響をね返す勢いで成長を続けます。

昭和40年に約87億円だった阿南市の製造品出荷額は、この半世紀で35倍に増加。企業誘致に伴う民間法人企業所得の増加などにより、平成4年度に256万3千円だった「一人当たりの市町村民所得」は、平成11年度には304万4千円と、県内の自治体で最高額となり、以降、平成26年度までほぼ1位の座に輝き続け、大きな経済効果を生んでいます。

## 開かれた新時代の扉

「平成の大合併」が各地でピークを迎えていた平成17年、阿南市においても那賀川下流域のまちとして同じ生活・文化圏を有し、共に発展を遂げてきた那賀川町、羽ノ浦町との間で合併に向けた活発な議論が行われました。

そして、平成18年3月20日、那賀川町、羽ノ浦町を編入して8万人の人口を擁する新阿南市が誕生しました。昭和40年前後に模索された1市2町の合併は、半世紀の歳月を経て実現。ここから、阿南市の新しい時代の扉が開かれます。

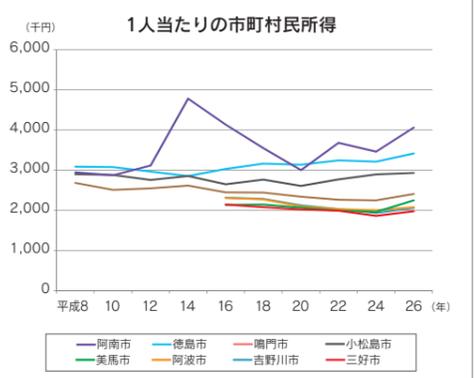
## 橋湾工業開発の成果

20世紀最後の年となる平成12年、橋湾に四国電力㈱と電源開発㈱が共同で建設を進めてきた「橋湾石炭火力発電所」が完成し、営業運転を開始しました。昭和48年に徳島県と阿南市が用地買収を開始して以来、誘致企業の撤退など曲折を経た橋湾工業開発は、21世紀に向けて大きな区切りを迎えることになりました。

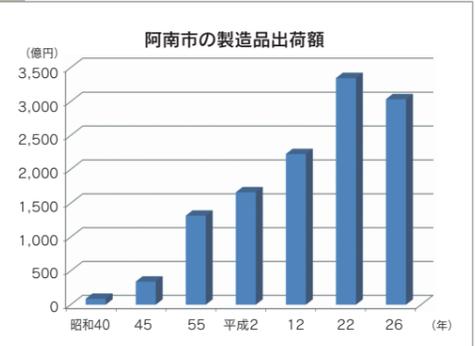
四国電力㈱と電源開発㈱による橋湾石炭火力発電所は、石炭火電としては国内最大規模を誇ります。最新鋭の環境設備をもって発電された電気は、四国のみならず関西、中国、九州方面にも送られ、西日本の経済



▲橋湾小勝に建設された「橋湾石炭火力発電所」。左側が四国電力㈱、中央から右側が電源開発㈱の発電所。



▲市町村民経済計算より



▲工業統計調査より